

磯松大悟展 信而好古

二〇二五年五月十日(土)～十七日(土)
作家在廊日 五月十日



料金後納
ゆうメール



青白磁輪花皿 Φ21/H4.5cm



青白磁瓶 Φ14/H26.5cm



青白磁盃 Φ7.5/H3.5cm



白磁リム小皿 Φ14.5/H3cm



青白磁壺 Φ17.5/H18cm



青白磁輪花鉢 Φ14.5/H6cm



青白磁徳利 Φ8/H13.5cm

磯松大悟展 信而好古

2025年5月10日(土)～17日(土)

作家在廊日 5/10

営業時間 11時～18時 最終日は17時迄

ギャラリーうつわノート 埼玉県川越市小仙波町1-7-6



1986年 山口県萩市にて陶芸家の家系に生まれる

2008年 武蔵野美術大学彫刻科中退

2009年 萩焼作家のアシスタント

2020年 京都に居を移す

2022年 京都府立陶工高等技術専門校修了

2025年 現在、京都市東山区にて作陶

京都で作陶する磯松大悟さんの初個展です。彼の作品は静謐な佇まいを持つ青白磁や白磁を中心に展開されています。作風には李朝や宋代の影響を感じさせる一方で、京都で学んだ和の要素も随所に織り込まれています。無駄を削ぎ落とした単色の器は、外見こそ寡黙ながら、その静けさゆえに鑑賞者の感性が問われます。自己を主張しすぎることなく、むしろ心の鏡のように、見る者の内面を映し出す存在ともいえるでしょう。静寂の中に言葉が宿り、単色の奥に豊かな色彩が広がります。孔子の『論語』にある「信而好古」は、「述べて作らず。信じて古を好むが、自分の考えを付け足さない」という意味ですが、これは単なる古典の模倣ではなく、「非主体的な精神性の中に主体性を見出す」姿勢とも解釈できます。磯松さんは職人としての在り方を大切にしながら、京都ならではの美意識を備えた割烹の器を作りたいと語ります。食器の口縁や壺の肩に生まれる僅かな釉溜まり、細部に宿る緊張感と微細な変化が、見る者の心に静かに響きます。自身の出自との相対性を見つめながら、「素」から出発し、器に自身の存在を溶け込ませることを志向する。その姿勢からは、焼き物への深い探求心と静かな気概が感じられます。本展は磯松さんにとって新たな一歩となる記念すべき個展です。李朝陶を手がける多くの陶芸家の中で、彼が追い求める静寂の果てはどこへ向かうのか。その行方を、この出発点から見届けるのもまた興味深いことでしょう。ぜひご覧いただければ幸いです。店主